はしがき

一橋大学創立 150 年史準備室長
森　宜人

2023 年度はついにコロナ禍に終止符が打たれ、キャンパスにもかつての活気が取り戻された寿ぐべき年度となりました。一橋大学創立 150 周年もいよいよ目睫に迫り、学内では、「一橋大学 150 周年記念サイト」（https://150th.hit-u.ac.jp/）の開設や、記念シンポジウムの開催―初回は 2024 年 2 月 10 日の社会科学高等研究院人新世研究センター（HIAS-ARC）設立記念シンポジウム「社会科学は人新世の危機にどう応えるか」―など、さまざまな準備が着々と進められてきました。2014 年の本ニューズレターの創刊は 150 周年記念事業の嚆矢をなすもので、10 年目の節目にあたる本号には、8 本の貴重なエッセーを収録することができました。

山本武利名誉教授からは、1952 年に南博先生が欧州出張後に「無許可」で中国に渡り、北京で開催されたアジア太平洋地域平和会議に出席するにいたった経緯とその後の顛末を、当時の本学評議会資料の写真を含めてご紹介いただきました。石川城太名誉教授には、池間誠先生や鈴村興太郎先生との関係についてのエピソードを織り交ぜつつ、ご自身の国際経済学研究の歩みを振り返るエッセーをご寄稿いただきました。本学経済学部卒業生である岡井紀道氏と高田智恵子氏には、それぞれ、戦後の本学西洋史学発展の基礎を築かれた増田四郎先生のゼミナールと、今世紀初頭から 20 年間の長きにわたりマーキュリータワーのグローバル・オフィスで携わってこられた 21 世紀 COE をはじめとする数々の大型プロジェクトに関する思い出をご執筆いただきました。本学商学研究科で研鑽を積まれた麗澤大学の趙家林教授のエッセーでは、文化大革命下の中国での学生生活や、1980 年代の国立での留学生活の様子が活写されています。いつも本誌にご執筆いただいている酒井雅子氏と野村由美氏からは、明治 18 年の東京商業学校と東京外国語学校・同校所属高等商業学校合併の歴史と、高等商業学校学友会および東京高等商業学校同窓会との関係を射程に収めた如水会創設記をご寄稿いただきました。最後に、田﨑宣義名誉教授による連載稿では、佐野善作先生旧蔵資料が整理された折に発掘された「白票事件」に関する史料が紹介されています。

明治、大正、昭和戦前期、昭和戦後期、平成、令和にかけての諸相を描いた 8 本の労作からなる本号は、一橋大学史のほぼ全期間をカバーしています。初代準備室長江夏由樹先生は、ニューズレター創刊号「はしがき」のなかで、本誌を「150 周年事業に向けての情報交換の場」として位置づけられました。本号のラインナップも、「情報交換の場」に相応しいものといえましょう。